都市幼児の健康・安全行動の形成における母子相互作用に関する研究

斉藤歓能（横浜国立大学）
高城義太郎（玉川大学）
高野陽（国立公衆衛生院）
荻須隆雄（玉川大学）
神宮英夫（東京学芸大学）
園田雅代（玉川大学）

目的

幼児が母親との日常における相互作用の中で健康安全行動を修得する過程において，筆者らは以下の２点が重要な鍵概念ではないかと予想を抱いた。

1) 自己統制力 ── 自分の行動や考えを，その場・自己の状態に適切なように見通しをたてて自己統制できること
2) 認知的協和 ── その行動の因果関係等を認知的に理解ができ，合理的な理由付けがなしうること

そして，これら２点を統合した概念を，筆者らは，幼児のセルフコントロールと把えた。

従来，幼児の健康安全行動形成の面では，pattern practiceや条件付けといった外からの働きかけの側面が重視されがちであったこと，また，心理学の分野においても上記のテーマは，学童以上を対象として考察されることが多かったことを鑑み，筆者らは，健康安全行動は幼児自身にとっても日常の中で触知し易いという特徴があり，健康安全行動形成過程における母子相互作用のありかたが，広義のセルフコントロールを培うのに大きな作用を及ぼしうると把え，本調査を実施した。

方法

対象児は東京近郊の幼稚園２園の年長児（５～６歳児）８０名　①まず，園の担任教師に対象児各々についての健康安全度検査（表１）の評定を依頼，その結果のヒストグラムを作成し（M＝26.99　SD＝4.47），M±1σでグルーピングした。優良群：３２点以上，２０人，普通群：３１～２３点，４６人，不良群：２２点以下，１４人　②次に対象児に健康安全行動面接調査を施行，これは図１３～図１７の５場面 ── 食事（子どもが好ききらいをし，テレビばかり見ている。）・病気（子どもの病気は治りかけである。外で遊ぶ子を見て，「外へ遊びに行きたい」と言っている）・道路への飛び出し（子どもがボールを追いかけており，自動車が近付いていることに気付いていない）・ジャングルジム（子どもがジャングルジムの頂上に立ち，母に向かって「のぼったよー」と手を高く挙げている）・おもちゃの取り合い（家に遊びに来た友だちとおもちゃの取り合いをし，大変な騒ぎとなっている）── から成っており，各図版を見せながら面接者が対象児と個別に適宜に質疑応答をするものである。各々の図版につき，以下の４点 ── a．もしあなたがこういうことをしたり言ったとしたらお母さんは何と言うか，どうしようとするか。b．お母さんにaのように言われたりしたら，あなたはどうするか，何と言うか。c．お母さんがそういうことを言ったり，したりするのはどうしてだとあなたは思うか。d．お母さんにそう言われたりしたらあなたはどう思うか。どんな気持ちになるのか ── を対象児から自然に反応が得られるように意図しつつ半構造的な面接法を採った。1人あたり２０～２５分。なお，面接者は録音を平行させ，反応の記述漏れを防いだ。③母親用には，上記の対象児用面接形式を質問紙法に代え，自由記述を依頼した。

なお，今回は，②対象児，③母親共にデータが得られたもののみを有効データとしたので，実際には，①のグルーピングに従ったデータ数は次の通りとなった。優良群：１５人，普通群：３１人，

不良群：10人　合計56人（有効データ率70％）以下に述べる分析結果は，この56人ずつの母・子のデータに基づいたものである。④，②対象児の反応評定を以下の手続きで行なった。各対象児の反応プロトコルをランダムに読み上げ，そこから幼児自身のセルフコントロール，即ち，自己統制力や認知的協和の内在が確かめられるものを1，不明・はっきりとそうではないと否定できるものを0，と評定した。各場面ごとに1・0の評定をし，評定者3名間の一致を必要条件とした。⑤，③の対象児の母親の反応評定は，④と同様の手法で各場面ごとに反応プロトコルをランダムに読み上げ，1・0の評定を行なった。即ち，母親が幼児のセルフコントロールを認知，或いは促進的に関わっていることが読み取れる反応を1とした。

結果と考察

対象児の面接調査の結果であるが，この評定値について各群，そして各場面について平均と標準偏差を計算し，2要因の分散分析を行なった。結果は，場面間では$F(4,265)=2.16$，群と場面との交互作用は$F(8,265)=0.51$で共に有意ではなかった。しかし，3群間では$F(2,265)=8.36$で1％水準で有意であった。これら5場面と3群の平均値は図18の通りである。得点は不良群・普通群・優良群の順で上昇している。特に，優良群では5場面全てにつき高得点を得ており，場面間の変動が他の2群に比して少ない。

一方，母親への質問紙調査に関する評定結果について，幼児の面接調査と同様の分散分析を行なった。結果は，5場面と3群間との交互作用が$F(8,265)=0.48$で有意でないことを除けば，場面間でも（$F(4,265)=3.22$，$p<.05$），群間でも（$F(2,265)=7.63$，$p<.01$）共に有意であった。図19は5場面と3群の平均値である。前述の対象児の結果とは異なり，母親の結果では不良群，優良群，普通群の順で得点が上昇している。このような母子間の不一致は，母親については質問紙調査であるため，社会的望ましさの方向への結果のズレと考えられる。また，5場面間では，3群とも，病気とおもちゃの取り合いの場面で高得点を得ている。このような傾向は，対象児の結果（図18）と同様である。これら2つの場面が母子いずれにとっても比較的わかり易く親近感の持てる状況であることを示しているといえよう。また，特に対象児のジャングルジム場面では，図18のように不良群が極端に低得点となっている。このことは，不良群の幼児においてのこのような場面での経験の乏しさや，潜在的危険性に対する予測能力の欠如や不備を表わしていると思われる。

これら2つの分析では，母子いずれにおいても優良群と不良群との比較では，常に優良群の方が高得点を得ている。つまり，優良群の子どもと母親との間には，以下のような循環が存在していることが伺える。母親は，子どもに対して子どものセルフコントロール（自己統制力や認知的協和）を促進するような指導をしており，子どもはそのような母親の働きかけのもとで自分の能力についての自己評価を正確に行ない，健康安全行動を遂行しているといえよう。そして，このような子どもの行動結果から，更に母親が多くの情報を得て子どもへの適切な働きかけを形成することが強化されている，と考えられる。

提　　言

データ数が少なく本調査結果から安易に一般化することには慎重であらねばならないが，セルフコントロールという視点が幼児の健康安全行動形成を考える上で有効であること，また，母親測の働きかけ，母子間の相互作用の有り様の特徴を抽出するのに実効性が高いことが確認されたといえよう。セルフコントロールの力は子どもに促成栽培的に身につけさせることは不可能である。母親を代表とする回りの人との日々の相互交渉の中でステップバイステップで修得していくものだが，健康安全行動は低年齢の幼児自身にとっても目標や見通し，予測を持てやすいという特質があり，しかもそれこそ日常の積み重ねの上に成り立つものである。願わくば，母親が子どものレディネスに応じつつ，セルフコントロール力を養ない育てるような健康安全行動形成の働きかけを心がけて欲しいと望む次第である。そのためには，母親自身の健康安全行動におけるセルフコントロールが十分に検討される必要があろうが，その第一歩として，母親が自分の子どもイメージを自覚的に把

握し直し正確な認知を持つこと，そのプロセスを援助できるヘルピング・プロフェッションが保証されていること等が不可欠であろう。

※ ■ … 特に注意して指導している事項・内容

図1　歯みがきについての指導（%）

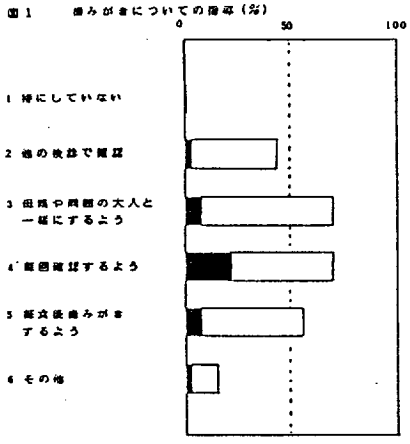


図3　排せつについての指導（%）

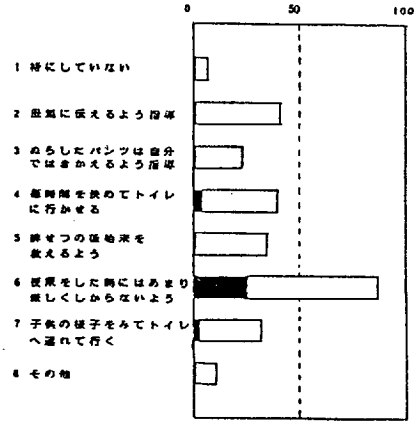


図2　外出後のうがいについての指導（%）

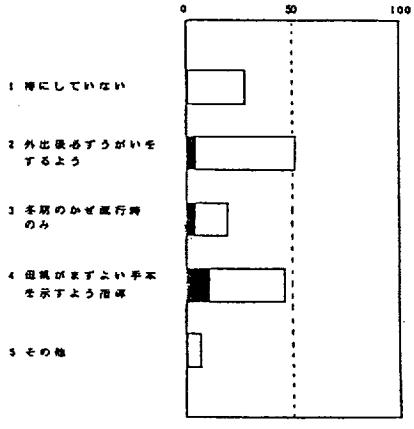


図4　就寝についての指導（%）

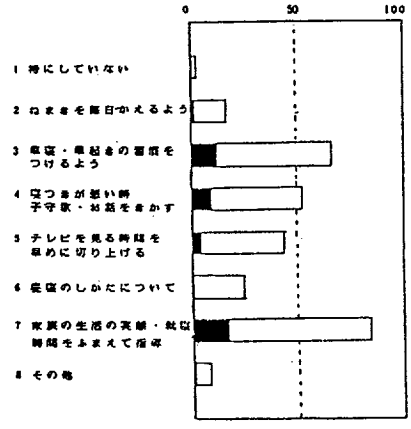


図5　食行動についての指導(%)

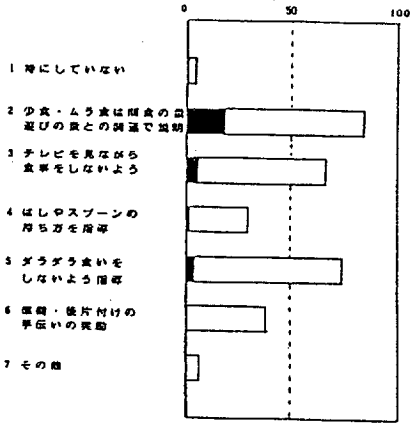


図7　遊びについての指導(%)

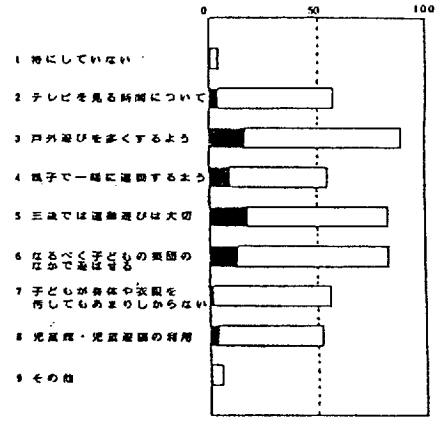


図6　幼稚園選の方法についての指導 (%)

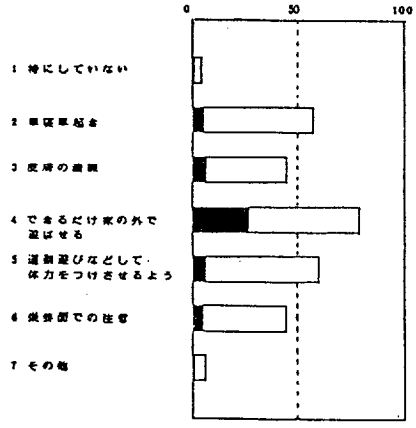


図8　子どもの遊び相手になる低頭の種類についての指導

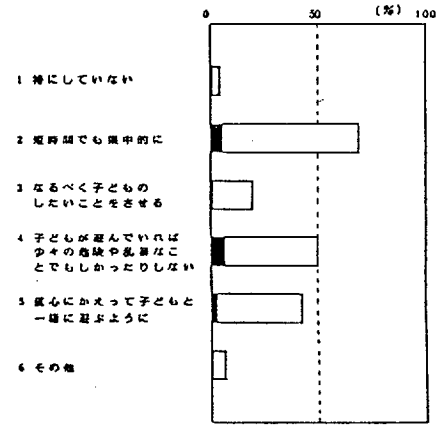


図9　安全のしつけについての指導（%）

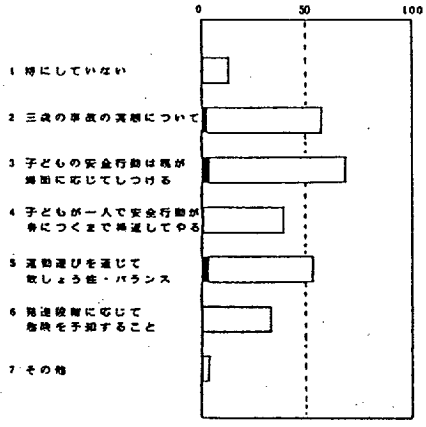


図11　三歳児のしつけをする時の母親の態度についての指導

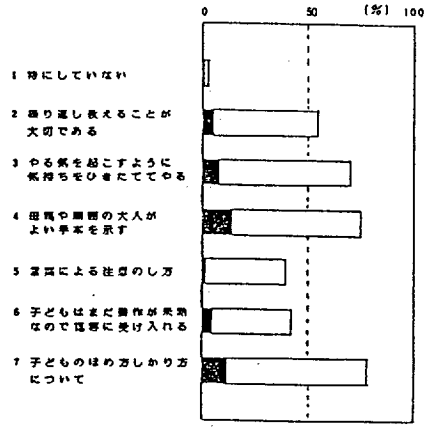


図10　事故防止についての指導（%）

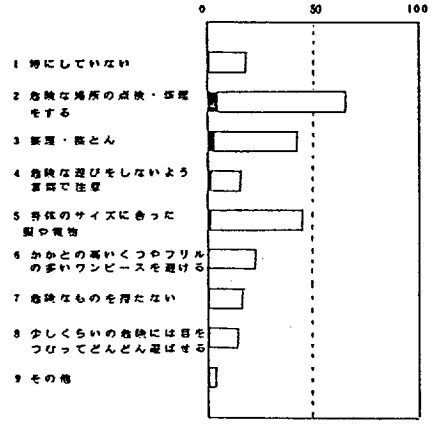
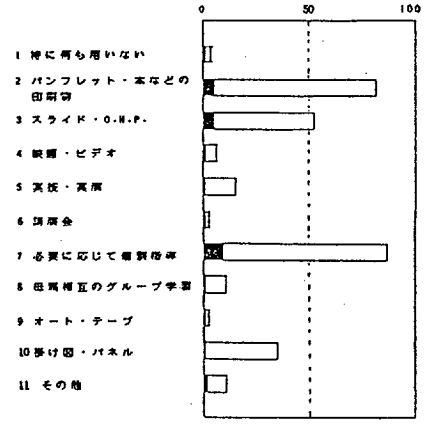


図12　指導するときは何を用いるか（%）



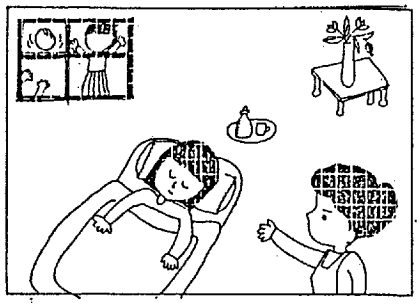


図 13

子どもの病気は治りかけです。外で遊んでいる子どもたちを見て「外へ遊びに行きたい。」と言っています。

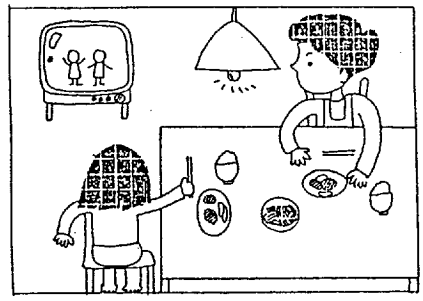


図 14

子どもが好ききらいをしています。テレビばかりを見て，なかなか食べようとしません。

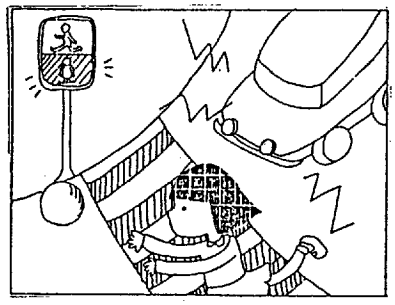


図 15

子どもが，ボールを追いかけ走っています。自動車が近付いていることに気がついていません。

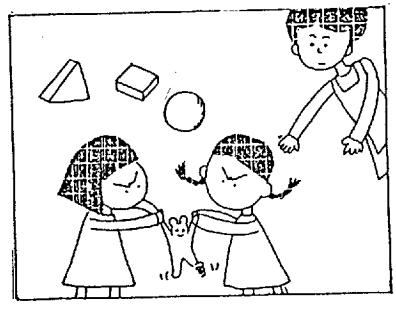


図 16

家に遊びに来た友だちと，おもちゃの取り合いをしています。大変な騒ぎです。

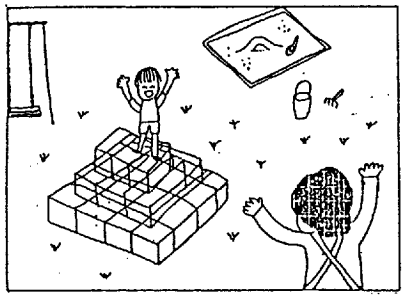


図 17

子どもがジャングルジムの頂上に立っています。お母さんを見つけて「のぼったよー。」と手を高くあげています。

表1　健康安全度検査　（高城　1972より）

a．いつも元気で毎日の生活を円滑に行なっていける体力をもっている。	あてはまる ・どちらともいえない ・あてはまらない
b．環境の変化に対する心身の適応力がある。	同　上
c．身体の養育のバランスがとれていて順調である。	同　上
d．治療しなければならないような病気はない。また病欠もほとんどない。	同　上
e．運動能力がすぐれている。	同　上
f．姿勢はいつも正しく保たれている。	同　上
g．食欲があって，楽しみながら食べている。好ききらいもほとんどない。	同　上
h．毎日の疲労は翌日までに回復している。	同　上
i．知的，情緒的，社会的発達が順調である。	同　上

表2　対象児の場面別・群別得点

群＼場面	(i)食事	(ii)病気	(iii)通院	(iv)ジャングルジム	(v)おもちゃの取り合	T トータル	
優良 15	0·5 ·531	0·6 ·532	0·5 ·536	0·5 ·531	0·5 ·536	2·6 1·936	2·6
ふつう 31	0·3 ·479	0·6 ·513	0·3 ·449	0·2 ·427	0·5 ·513	1·8 1·785	1·9
不良 10	0·1 ·318	0·3 ·493	0·3 ·493	0·0 ·00	0·3 ·493	1·0 1·528	1·0
T	0·9	1·5	1·1	0·7	1·3	5·5	

図18　対象児の場面別・群別得点グラフ

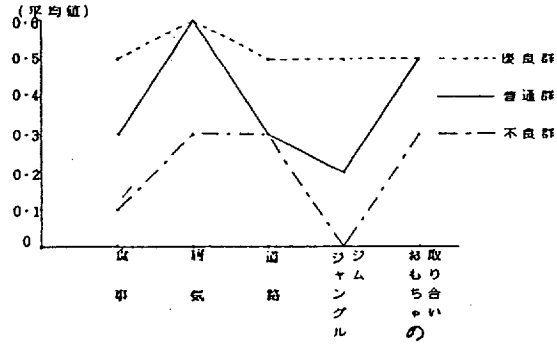
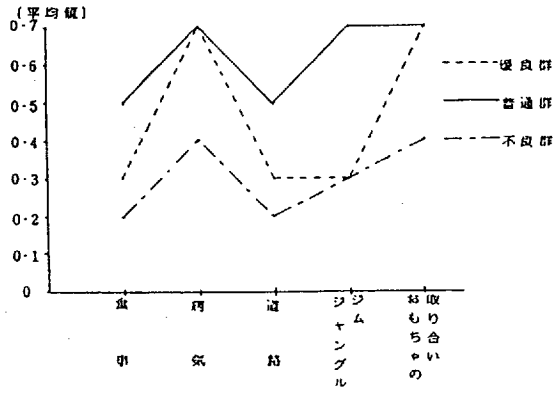


表3　対象児母親の場面別・群別得点

群＼場面	(i)食事	(ii)病気	(iii)通院	(iv)ジャングルジム	(v)おもちゃの取り合	T トータル
優良 15	0·3 ·496	0·7 ·498	0·3 ·496	0·3 ·496	0·7 ·498	2·5 1·554
普通 31	0·5 ·516	0·7 ·479	0·5 ·516	0·7 ·479	0·7 ·491	3·1 1·706
不良 10	0·2 ·427	0·4 ·533	0·2 ·427	0·3 ·493	0·4 ·533	1·5 1·787
トータル	0·9	1·8	1·0	1·3	1·8	7·1

図19　対象児母親の場面別・群別得点グラフ



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目的

幼児が母親との日常における相互作用の中で健康安全行動を修得する過程において,筆者らは以下の 2 点が重要な鍵概念ではないかと予想を抱いた。

1)自己統制力－自分の行動や考えを,その場・自己の状態に適切なように見通しをたてて自己統制できること

2)認知的協和－その行動の因果関係等を認知的に理解ができ,合理的な理由付けがなしうること

そして,これら 2 点を統合した概念を,筆者らは,幼児のセルフコントロールと把えた。

従来, 幼児の健康安全行動形成の面では,pattern practice や条件付けといった外からの働きかけの側面が重視されがちであったこと,また,心理学の分野においても上記のテーマは,学童以上を対象として考察されることが多かったことを鑑み,筆者らは,健康安全行動は幼児自身にとっても日常の中で触知し易いという特徴があり,健康安全行動形成過程における母子相互作用のありかたが,広義のセルフコントロールを培うのに大きな作用を及ぼしうると把え,本調査を実施した。